

ラクゴ・ザ・フューチャー

第三十四回…野牛一族の陰謀も筆の誤り

文：田中啓文

「こんにちは」

「お、おまはんかいな、こっちはいい。今日は何の用事や」

「こないだ森で栗鼠虎に会ってしもて、暇でしゃあないさかい、ぶらぶらと。なんや、あんたも暇そうでんな」

「わしも今日は何にもすることないさかい、ビデオで『おじやる丸』見とったんや。まあ、あがつて、お茶でも飲んでいき」

「おおきにはばかりさん。最近、『かめくん』ゆう小説が流行ってるらしいですな」

「ああ、北野勇作さんのやる。田中何とかとか牧野何とかが書くようなえげつない小説とは大違いで、心温まる話や。」

「こつこつおもしろかったで。まあ、石焼けかな」

「石焼け？ ビビンバか何かですか」

「あ、まちこつた。癒し系、癒し系。ちよつとのちがいやがな」
「えらいちがうわ。で、どんな話でんねん」

「（ぎくっ）あ、どんなんやったかなあ、だいぶ前に読んだんで、細かいところは忘れてしもたわ。また、今度、ゆつくり教えたる」
「そんなん言わんと、今、教えとくなはれ」

「ええとやなあ、かめくんとうさくんがかけっこをするんや」
「ほうほう」

「ところが、ブラック魔王のごとき卑怯未練なかめくんは、うさくんを妨害してでも勝とうとすんねん。足の早いうさくんが疲れてちよつと休んでたところへ、殺人蟻（キラ・アント）の大群を浴びせかけよるねん。うさくんは、『うわっ』

と叫んで飛び退いたが、時すでに遅し。無数の蟻たちの分泌する酸のせいで、あわれにも全身がどろどろに溶けてしまうんや」

「ほんまですかいな」

「ほんまや。歌にもあるやろ。アントおっしゃる、うわっ、蟻酸、て」

「……………そういえば、こないだ、心霊の作ったパンいうの、売ってましたで」

「なんや、それ」

「なんでも、霊媒がウィジア盤を使った降霊術を行って、有名なパン職人の霊をおろすらしいんですわ」

「うまいかもわからんな、それ」

「テレビでも『マーシャル』やってましたで。霊体マークのウィジア盤いうて」

「はあ？」

「わからんか。霊体マークのウィジア盤いうて」

「それもいうなら、兵隊マークの富士屋パンとちやうか」

「わかりますか」

「わかりますかて……………そんなCM、もうおっそろしい前の話で誰も覚えとらんやろ」

「うちのすぐ近所に富士屋の工場がありましたん」

「そんな話誰も聞いてない」

「ところで、サザエさんて、昔、ゴールデンタイムに再放送してまへんでしたか」

「してたしてた。主題歌も、お魚くわえたドラ猫……………いつやつとちやうかった」

「まーどをあけーましよ、呼んでみましようサザエさん、いうやつですわ」

「中身もかなりちごてたで。登場人物とかも」

「え？ そやっ たかなあ……」

「サザエさん一家に、変な居候が混じるねん。山田仲代ゆう女やねんけど、これがマスオさんとできてしもて、サザエさんが怒りのあまり、頭がおかしいなってしまっんや」

「そやっ たかなあ……」

「サザエさんは、その女を憎んで憎んで憎み抜いて、丑の刻まいりをしたりして呪いをかけるんや」

「そやっ たかなあ……」

「歌でもあるやろ、うちの女死ね、仲代死ね、て」

「そやっ たかなあ……」

「そのうち、頭がおかしいなってきてな、サザエさんは、誰を見ても自分に思えるようになってもうたんや」

「そやっ たかなあ……」

「歌でもあるやろ。私もサザエさん、あなたもサザエさん、て」

「そやっ たかなあ……」

「最後には完全に発狂してしもて、とうとう狂った高笑いを残して死ぬんや」

「そやっ たかなあ……」

「歌でもあるやろ。笑う声まで女死ね、あっはっはっは、女死ね……いうて。あわれな話やなあ」

「思い出しました。たしかそうでした」

「開き直りよったな」

「しゃあけど、我々は、これ何してまんねん。何か特定の話題についてしゃべるでもなく、かといって小ネタ集でもなく……」

「小ネタ集か。あれめっちゃめっちゃ評判悪いさかい、もうやめる言っつったわ」

「中ネタ集は？」

「よけいに悪いらしい。今回は、何か高尚な話題について

デスカッションしたいもんやなあ」

「デスカッションで何でんねん」

「まあ、わかりやすういうたら、議論やな」

「ああ、カメラと戦った包丁みたいな怪物」

「それは大悪獣ギロン……そんなしょうもないネタはええねん。なんかわしにききたいことないか」

「そんな急に言われても……」

「なんでも答えたるで。わしは知らんことは知らんけど知ってることは知ってるって評判やからな」

「そうそう、こないだからいっぺんおたずねしようと思ってましてんけど、柳生一族いのいてまんなあ。あれはいつたいどいう連中ですねん」

「何？」

「柳生一族ですわ。よう時代劇とかに出てきますけど、ほんまは何をしとるやつらか、というのを知りたいんです」

「おまえなあ……ちようどええ機会やから言つといたるわ。」

何の脈絡もない話題というのがいちばん困るんや。だいたい会話というのは、今までの流れから考えて、次はこう来るな、とか、そういう予想がたつもんやが、なんで、かめくんで心霊パンでサザエさんで大悪獣ギロンで、最後が柳生一族やねん」

「よろしいがな。何でもきいてええ、ちゆうからたずねましてん」

「そらそうやが、会話というものには一定のルールというもんがあるからな」

「あんた、知りまへんのか、柳生一族」

「あほ、知つとるわ、そんなもん。わしを誰やと思とんねん。ウォーキング・ディクショナリーやぞ」

「ほな、教えてもらいましょか」

「でも、今日はちよつとこれから大事な用があるさかい、ちよつと出かけてくるわ」

「暇でしゃあないから『おじゃる丸』見てる言つてましたがな」
「急に思い出したんや」

「あかんあかん。柳生一族のことを教えてから用事に行きなはれ」
「しゃあないな。ほな……教えたるわ。一回しか言わんからよう聞けよ。柳生一族というのは、今でこそ『柳生』という漢字をあてるけどな、だいたいおまえ、こんな字、『ヤギユウ』と読めるか？」

「そういえば、『ヤナギナマ』としか読めまへんな」

「そやろ。実は、柳生一族は、もともとは野牛一族と書いたんや」
「ほんまかいな」

「ほんまや。野牛一族は、代々徳川家に仕えた由緒ある家柄やが、もともとは奈良の豪族でな、あまり肉食の習慣がなかった江戸時代に、牛肉のおいしさをひろめることが野牛家の使命やったんや」

「ほう……何となくもつともらしいでんな」

「野牛一族の始祖は、有名な野牛石舟斎（せきしゅうさい）や。この人は、石焼きステーキを発明したところから、石舟斎と号したんやが、その息子が、但馬肉のおいしさにとことんこだわった野牛但馬守宗矩（たじまのかみむねのり）や」

「錦之介がやった役ですな。『夢でござるー』ちゅうて」

「そうそう。但馬守は、単に但馬牛やったら何でもええと言つてたわけやない。とくに、牝牛より牡牛のほうがうまいことを発見したんや。歌にもなってるで。『おー、宗矩、あなーたの牡牛はどー？』」

「わたーしの牡牛はー」

「おまえは歌わんでもええねん。その但馬守宗矩の息子が隻眼で名高い野牛ジュー兵衛と、これまた高名な野牛又ジュー郎や。この二人は鉄板焼きで肉をジューツと焼くときの音から名付けられた」

「又右衛門ゆう人もおりましたな」

「うーん、それは洒落にならなので、この際、おらんかったことにしよ。とまあそういうわけで、この野牛一族は代々、牛肉のおいしさをひそかに日本に広めていこうとしていたわけや」

「なんで、ひそかにせなあきまへんねん」

「当時の日本では、表だつて肉を食べることは禁止されとったんや。薬食いちゅうて、薬として食べることはあつても、おっぴらには行われてなかつた。それを何とかしようとしたのが、野牛一族なんや。これが世に言つ、野牛一族の陰謀やな」

「それで、肉食はひろまりましたんか」

「ところが、思わぬところから横やりが入った。野牛一族は二手にわかれ、一つは江戸野牛といわれる但馬守宗矩、ジュー兵衛たちの系統。彼らは三代將軍家光に仕えとつたが、こつちはほんまは傍流なんや。本流のほうは、尾張家に仕えとつた。尾張の野牛家は、自分たちこそ本流やのに、江戸野牛のほうが將軍家指南役とかいうて威張つとるのがおもしろい。それで、江戸野牛に反旗をひるがえして、『日本人は牛肉を食うな。野菜を食え。牛肉食うたら牛になるぞ』キャンペーンを展開したんや」

「長い名前のキャンペーンですな」

「尾張野牛家のリーダーは、これまた有名な野牛連野菜」

「五味康祐の小説にも出てくるやつですな」

「そや。その嫁はんがアロエ美奈」

「あほな」

「こうして、江戸野牛、尾張野牛の戦いが繰り広げられることになった。そこで、暗躍したんが、裏野牛や」

「子連れ狼にも出てきますな」

「裏野牛ゆうのは、要するに忍者みたいなもんや。又の名を

アパッチ野牛群ちゅうてな、奈良の野牛の里には、この裏野牛を養成する秘密組織があつたらしい。生まれたばかりの赤ん坊をさらってきて、忍者としての訓練を受けさすんや。後腐れのないように、親は惨殺して、赤ん坊を孤児にするちゅうから驚きや」

「むごたらしいことしますな」

「その赤ん坊を、紙袋にいれて野牛の里まで連れてかえったそうや。袋孤児ちゅうてな」

「しょうもなー」

「裏野牛の初代リーダー知ってるか？ 將軍家光の乳母として有名な春日局や。はるひきよく、とちがうで。かすがのつばねやで」

「知ってまんがな、そんなこと」

「もっともそのときはリーダーを退いて引退しとったけどな。こうして裏野牛をまじえた江戸野牛と尾張野牛の戦いは長く続いた。ときには、江戸野牛側が何千頭という牛をけしかけて、暴走させることもあつたらしい」

「西部劇でようある、スタンピードゆうやつですな」

「長い牛の列ができて、モー列や」

「どんどんしょうもなくなつてきてまつせ」

「とうとうその不モーな戦いにも終止符が打たれるときがきた。江戸野牛、尾張野牛、それぞれ一人ずつ代表者を出して、決着をつけようということになったんや」

「なるほど」

「尾張野牛のほうは、もちろん野牛連野菜が代表になった。しかし、江戸野牛のほうは考えた」

「野牛ジュー兵衛は出まへんのか」

「肉の食い過ぎで、コレステロールがたまつてしもてあかんのや。そこで、しかたなく、代表となる武士を公募で決めることに

した。勝った者には、モー打賞として賞品を出す、という広告を公募ガイドに載せたんや」

「その賞品はなんでんねん」

「大きな握り飯や」

「モーむす、ですか」

「わかったか」

「わからいでか。それで、代表は決まりましたんか」

「決まった。京都に、一人のひげもじゃで容貌魁偉な野武士がおったんや」

「江戸時代に野武士でっか」

「あかんのかい。歌にもあるやないか。京都にいるときゃ、野武士と呼ばれたのー」

「べつにええけど」

「野武士には、何万円かを支払うということで、商談が成立した。でも、昔のことやから、何万円ゆつても、すごい価値やで。昔の何万円出ていますー」

「べつにええけど」

「そして、野牛連野菜とこの野武士が勝負することになった」
「どっちが勝ちましたん？」

「連野菜や。しかし、勝った連野菜は、なぜかぼーっとしている」
「勝ったも呆然、ちゅうやつですな」

「実は、野武士の正体は、なんと裏野牛の元リーダーで、今は引退していた春日局やったんや」

「引退してOGになってたから、OGビーフ」

「春日局は、肉のことから肉親どうしが肉しみあって争いことが長く続くのはあい肉のことやと、將軍家光に申し出て、江戸野牛家が牛肉を広め、尾張野牛家は魚の王様、鯛を広めるようにさせたんや」

「日本人はやっぱり魚でんなあ」

「こうして、江戸野牛家と尾張野牛家は、仲のいい関係を保てるようになった」

「肉・鯛関係ですな」

「肉だけをひそかに広めようとした野牛一族やが、結局うまくいかんかった。野牛一族の陰謀も筆の誤り、というわけやな」

「ほんまですか」

「嘘じゃ、あほ」

(了)